
魔法少女リリカルなのはStS 転生者の行方

回覧板(元godaccel)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStS 転生者の行方

【Nコード】

N7558R

【作者名】

回覧板（元godaccele）

【あらすじ】

とある管理外世界の崩壊から始まる転生の連鎖。誰が誰かわかるかな？ 物語の最初の方はそんなに転生してないので見分けがつきます。

第一話：天城キルアの日常

暗く閉じた世界。終焉を迎える世界。

魔法が使える奴らはみんな転移してしまった。

しかし男、ヴェルディ「バルムンクは魔法が使えるのに世界に残っていた。

ヴェルディには家族がいた。美味しいアップルパイを焼いてくれる妻、ミューラ「バルムンク。就職が決まり久々に酒を飲んだ息子、アルザス「バルムンク。彼氏と毎日いちゃいちゃするが晩御飯までには絶対帰る娘、シルヴィア「バルムンク。

かつて悠久の都とまで呼ばれた首都、ローデンベルグは今や死都となっていた。

当然だ。みんな消えるのだ。消されるくらいなら自ら、と考えるものは少くない。そしてそんな人達を見て、正気でなんていられない。

ヴェルディは逃げなかった。家族を逃がしたからだ。彼の魔力量は次元転移をちょうど三人行えるだけ、妻と息子と娘の三人を逃がした時点で、もう魔力は底尽きていた。

しかし満足していた。

家族に恨まれるのは仕方がないと高をくくってはいる。それでも恨まれるだけマシだ。死んでしまっただけそんなことも出来なくなるのだから。

「しかし、恨まれたまま死ぬのは辛いな。ミュー、アル、ルビィ、

——ごめんな」

世界が閉じた。

ズキツと頭に針が刺さったような痛みがした。

天城あまぎキルアは目覚めた。酷く頭が痛い。

先日起こった管理外世界の崩壊というイレギュラーな災害による難民の受け入れや二次被害の可能性検査という仕事をしていたのが原因だろう。結局自宅に戻ったのが深夜三時、寝たのはその三十分後である。さらに朝は早いので今現在の時間は六時、満足に眠れているわけがない。

「あー、頭痛い……。ちょっと働きすぎたか」

ようやく仕事にも慣れてきた三十歳、今まだ独身の天城。そろそろ本格的に婚期を見極めないと一生そのままになるかもしれない。

だが顔が良いという訳でもなく、給料が良いという訳でもなく、頭が良いという訳でもなく、出会いがある訳でもない。正直半分以上諦めている節もある。

それはさておき、天城はまだ少しジンジンとする痛みを我慢して、服を着替えた。執務官の制服だ。

天城執務官。執務官の中では結構有名な名前だ。曰わく彼は働きマン、悪く言いかえるなら預けられた仕事を拒めない、そんな人だ。だからいつも彼は仕事をしている。休みの日でも出勤して、いの一着に仕事につく。それが彼の習慣であった。今日は少し遅めに起きたが、それでもなお早い。

「さて、行きますか」

髪も適当に悪くない程度に整えて、シャッターを開いて、中にある車に乗り込む。スポーツカーだ。

それから飛ばして管理局へ。

駐車場に車を停めて中に入る。自分の場所に行く途中、久しぶりに自分より早く来ている執務官に出会った。

歳は二十歳くらいだろうか、金髪の美しい女性だ。女性経験が乏しい天城でさえ、そう思えるような女性だった。

「名前は何て言ったかな……。そうだ、フェイト・テストロッサ・ハラウンだ」

若くして執務官になった一部ではアイドルのような女性、こんなところで寝ていると体によくはないのにどうしたのかな。そう思った天城は失礼して画面を覗く。

そこにあつたのは自分と同じ事件の調査書だった。一晚中書いていたのか、その量は決してすぐに読める量ではなく、かなり微細なことまで書かれている。

仕事熱心なんだな、若い奴らが浮き足立つのも分かる気がする。

天城は上の制服を脱ぎ、フェイトに被せ、自分は資料をコピーして自分の場所に行き、コーヒーを片手にゆっくりとじっくりと読み始めた。抜け落ちがあつたりしては大変だ。最初の内は一つの失敗が大事に至ることもあるのだから。

いつの間にか頭の痛みはひいていた。きっと天使のような寝顔を見て疲労がふつとんだのだろう、そうでなければ、まだまだ若い執務官に先を越される訳にはいかないと心が奮い立ったのだろう。

どちらにせよ、柄に合わない行為だがな。天城は一つ苦笑し、それからはずっと真顔で資料に目を通していった。

しばらく読んでいると、一人の女性が近付いてきた。

「あの、これを……」

「ん？」

よく見るとそれは自分の制服だった。

はてな、落としたのかな？ ……違う、誰かにかけてあげたんだ。誰だったかな……。

「ああ、ありがとう。君は誰だったかな？」

「フェイト・テストロツサ・ハラオウンです」

「そうか、そうだったな。最近物忘れが激しくてね、すまない。私は天城キルアだ」

「ありがとうございます。あの、その資料は……」

「ああ、これはまたすまない。無断で拝借させてもらった。漏れがないかを見ていたのだが、大した腕だ、間違いどころかお手本のよ
うな資料だったよ」

天城は資料をフェイトに返して制服を受け取る。用はすんだし、朝食でも食べるか……少し遅くなってしまったが。

「制服わざわざありがとう。私は今から朝食を食べるが、君はどうする？」

「え？」

「居座っていたのだろう？ お腹は減っていないのか？」

「あ、空いてます」

「なら行こう」

そう言うってから制服を羽織る。やっぱりきちんとしておかないと落ち着かない性格なのだ。

淡々と歩いていく天城を肅々と追いかけるフェイトも、なんだかんだあってもお腹は減っているのだろう。

食堂にはまだ人はまったくいない。そもそもまだ用意すらされていないので、何かを食べるのは不可能な状況だ。フェイトは今更ながらに気付いて、先輩のミスをなんとかフォローしようとして、喉まで出かかっている言葉を遮るように天城が言う。

「オムライスとかでいいよな？」

「え？ あ、はい」

フェイトが返事をしたのを確認してから、天城は調理室に消えた。なんだか頭が混乱してよく分からないフェイトだったが、とりあえず椅子に座って待つことにした。

それから十五分ほどしてから天城は皿を二つ持って返ってきた。皿の上には焼きたてのオムライスが乗せられている、とても美味し

そうだ。

不肖天城キルア、伊達に三十歳まで独り身の男。悲しいかな。

それはさておき、食べ始めた二人。天城の作ったオムライスは特別美味いというわけでもないが、そらなりに美味しいと評価出来るようなものだった。伊達に（以下略）。

そんなこんなで適当に世間話をしながら食べ終え、天城がフェイトを制して淹れたお茶を二人で啜りながら一息つく。

「オムライス、ありがとうございました。美味しかったです」

「そりゃよかった。男の味付けだから不安だったんだ」

「いつも料理をされるんですか？」

「そうだな。一人で外食するのもつまらないからな」

「一人、ですか？」

「ん？ ああ、俺は酒を交わし合う仲間もいないからな。管理局に入って執務官になって、それからずっと仕事に打ち込んできた。それが辛いとは思わなかったが、気付いた時には俺だけがポツンと一人って訳だ」

何の気なしに言った後、人に話す話じゃなかったなと後悔する天城。目の前で寂しそうにするフェイトを見てどうしたものかと悩んだ。

「でも今日は一人じゃなかった。こんな綺麗な人と一緒に朝食が食べれて嬉しいよ」

半分お世辞、半分本音。どこからが前者で、どこからが後者なのかは天城本人しか知り得ないが、それでも感謝の気持ちだ。

すると寂しい顔はどこへやら、ほんのりと頬を朱に染めるフェイト。

「さて、仕事に戻るか。君もまだ終わってないんだろ？」

「はい」

朱をスツと引っ込ませ、キリツとした顔で答えるフェイト。天城は他の若い奴とは大違いだなと思いつつ、この頑張りが凶と出ないことを祈っておいた。

フェイトと別れて仕事スペースに戻った天城は適当に雑務をこなしながら、真剣に資料を纏めていく。優先することをはっきり区別して仕事をするのも天城の良いところだ。

仕事もキリが良いところまで終わり、時間は十二時ちょっと前、いろんなところから世間話や仕事話が聞こえてくる。そんな一種楽しさに満ちた話を聞きながら食堂に向かった天城は、適当に昼食を取りながら事件について思案する。

今回起こった管理外世界の崩壊は他に類を見ない極めてイレギュラーなことだ。起きたのが一つだけというのがまだマシであったが、どうにも納得出来ないものがある。

何故、崩壊したのか。そして、どうして崩壊したと知ったのか。この二点。

天城自身明確な答えは持ち合わせていないが、この答えが出た時、事件は解決の方向に向かうだろうと思っている。

そして消えた世界。崩壊ではなく消えたというのであれば過去に事例が無いわけではない。最近でも一度そこを見つけるために大事件が起こったのだから。

伝説の都、アルハザード。永遠に消えた最強最古の文明があった都市。何か関係があるのかもしれない。

天城はため息をついた。それを知る術はきわめて少ない上に、知る術をすべて行ったとて分からないかもしれないからだ。ため息をつきたくなるのも頷ける。

だから今は難民の対処と二次被害の可能性を考える。

天城は食べ終えた食器を戻して自分のスペースに戻った。仕事を再開するためだ。

それからしばらく、誰が話しても振り返らなくなった。天城が集中した時の現象だ。それを知っているものは今は無理かと諦めて、知らないものは嫌われたのかと思ってしょんぼりするのだった。

何にせよ、天城が気付くのは集中がキレルまでのだが、それはまだまだ先の話である。

集中がきれたのは日が変わった直後だった。静寂に包まれた空気の中で空腹を覚えた天城は、適当に腹に何かを入れようと思い立って席を立とうとした。しかしそれをする前に見つけてしまった。後輩が置いていった資料などの紙やデータの近くに、食べやすく半分に切られたサンドイッチとすっかり冷めたコーヒーを。

とりあえず自分宛であることは間違いないだろうと手を伸ばした天城は、サンドイッチが置かれている皿に紙が挟まれているのを見つけた。

サンドイッチを咀嚼しながら紙を拾ってみる。手紙のようだった。手紙には、「頑張ってください。フェイト」とだけあった。少しだけ嬉しくて泣きそうになってしまったので、がつくようにしてサンドイッチを頬張る。うん、美味しいな。きっと朝食のお返しだろう。

サンドイッチを食べ終わり、すっかり冷めたコーヒーで喉を潤しながら、今まで書いた資料に目を通す。集中して書いていたので間違いはないだろうが、やっぱり確認しておかないと気がすまないのだ。

一通り確認した天城は満足げに頷いてから、帰り支度を始める。仕事に熱心ではあるが居残ってまでするほどの仕事は経験したことがないから、なのでいつも通り帰宅しようとした天城は、ふと今朝のことを思い出した。一度考えてしまったからには確認しないと気がすまなくなってしまう。荷物を机に戻して、気になる目標を確認するべく動く。

目標、フェイトのデスクには近づくまでもなく人がいるのがわかった。物凄く静かだからこそ響く独特な機械音が証明しているのだ。

天城はこのまま帰ろうかなと一瞬考えたが、それでも性格的に無視出来ないのてついつい声をかけてしまう。

「まだ仕事か？ 熱心なのは分かるがほどほどにするんだな。体を壊しかねん」

ビクツと体を震わせてから、フェイトの顔が天城の方に向いた。

「サンドイツチ美味しかった、ありがとう。そのついでだ」

「あ、どういたしまして」

「じゃあな。ほどほどにして今日は帰った方がいい。疲れが溜まっても仕事の邪魔になるだけだから」

そう言ってから返事を待たずに踵を返す天城。柄にもないことを言っただけで後悔しながら、罪悪感が消えている訳ではないこの現状をどうしたものかと考える。そうしている内に車に着いてしまった。仕方ないので乗り込み、発車させる。

眠たいな、そんな事を考えながら。

早く帰るように言われたフェイトだが、まだまだ纏めることがたくさんあるので悪いとは思いつつも忠告を無視して仕事を続けていた。正直疲れはあまり溜まっていないうちで思っているので仕事には響かないだろうと高を括っている。

だが時間が進むに連れて視界が上下にし始めていた。何とかしっかりしようとしても体が言うことを聞いてくれない。忠告聞いてくんだっただけで後悔し、このまま寝てしまおうと決意する。

そこからは早かった。

手前の荷物を横にどけてゆっくりと腕を組んで机に伏せる。するとすぐに眠気がせり上がってきた。

「明日も、制服かけてくれるのかな？」

期待はしないが、少しだけ気になったフェイト。そうだったら申し訳ないな、と考える意識は沈んでいく。

やがて完全に寝る状態になるのだが、その直前、確認するのも思考に浮かばないくらい眠りが近い時、暖かい空気がフェイトを優しく包んだのだった。

第一話：天城キルアの日常（後書き）

フェイトさんルートと思った人はいつか残念な思いをします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7558r/>

魔法少女リリカルなのはStS 転生者の行方

2011年4月22日00時40分発行